

七転び七起きの介護記録 ④



《 リハビリ三昧の日々 》

転倒による頸髄損傷、四肢の不全麻痺で緊急入院した父は、手術を受けないことにして、回復期リハビリテーション病院に転院した。

転院に当たって、私は日に1度は、病院に顔を出すことに決めた。基本的には夕食の介助を行う、どうしても都合がつかなければ、洗濯物を届け、寝顔を見るだけでもよいので、病院に通うことを日課にした。



リハビリ病院では、理学療法士や作業療法士によるリハビリが、1回につき40分から1時間、それが日に2回から3回、合計2時間程度行われる。

仕事が終わって夕方面会に行くと、リハビリ中という日が多い。家族が病室でできることがあるのではないかとしっかり見学する。

リハビリは、筋力増強のトレーニングや関節を動かす運動が中心だが、特に、理学療法では基本動作の訓練を、作業療法では上肢の機能訓練に重点をおいているようだ。

体を丁寧にもみほぐしてもらった後、肘をついて体を起こす、寝返りを打つ、プッシュアップ(腕を使って腰を浮かせる)、車椅子に移る、脚や腕の曲げ伸ばしなどの練習を繰り返している。



リハビリ病院に転院してからの父の回復ぶりはめざましい。日に日に、体幹がしっかりして、座った姿勢を保持する時間が長くなっている。

転院後1週間で、食事の間、ベッドを起こしても、体が倒れることなく座っていられるようになった。左手にスプーンを持ってご飯やデザートを食べることも少しずつできるようになった。お茶のカップも持つことができた。右手も動くようになってきている。

精神的には不安定で、夜には「親父の所へ早

ミツ 伊志井

く行きたい」と泣くときもあるが、身体的には確実に回復に向かっている。



転院後10日目のことである。いつものように、夕食を介助していると看護師に言われた。「昼食はお一人で全部召し上がりましたよ」「えっ、そうなの？ お父さん、すごいね、全部一人で食べれたんだ」

「誰も食わせてくれんで、自分で食わないかんのだわ」

と、父はのたまった。

「夕飯ももう少し、自分で食べてみようか」

「まあ、ええで、早く食わせてくれ」

と、スプーンを持とうとしない。

リハビリの成果か、父の食べようという意欲が強いのか、気が付かぬうちに、スプーンを持って、食べることができるようになっていた。

私が側にいると、食べさせてもらうのが当たり前になってしまっている。自分でできることまで手を出してはいけない。明日からは夕食の時間からちょっとずらして面会に来ようようにしよう。



年の瀬も押し迫ってきた。リハビリの時間以外はベッドに横になっている父にも、年末の慌ただしさが感じられるようだ。病院は新規入院患者を受け入れないし、正月を家庭で迎えるために外泊という患者もあり、ベッドが空いているのもわかるのだろう。

「正月までにはうちに帰る」と言う。

「そうだね、帰れるといいね。帰ってもいいか、先生に聞いておくね」

と言っておく。

父はこのところ、毎日「帰る」と言っている。

「正月にはうちで餅が食べたい、3が日はうちで過ごしたい」そんなことばかり考えているようだ。

そんな父になんて言えばよいだろう。外出許可は出ている、「車いすでスムーズに移動できれば」の条件つきで。実家は段差だらけの古い日本家屋、門に段差があり、玄関前まで石が敷かれて、車いすで移動しにくい。玄関にもまた段差があり、玄関土間から高い上がり框がある。リフォームを繰り返した室内にも、何センチもの段差がある。ごまかしようもないので、はっきりと父に告げる。

「先生が、まだ無理だっておっしゃったよ」

「そうか・・・」

しばし、無言。その後、

「帰りたいなあ」

と、父は泣き出しそうになっている。

OT（作業療法士）「今日は何日？」

父「12月にじゅう・・・何日だ？」

OT「何日かなあ？」

父「26日か？」

OT「だんだん近くなった」

父「30日か」

OT「惜しい。大晦日だよ。明日はお正月」

父「そうか。病院2年越しか・・・」

OT「そうだね。明日もリハビリあるよ」

父「リハビリあるなら正月も帰れんか」

こうして、父は帰れないことを自分に納得させているのだった。



年が明けても、リハビリ三昧の日々は続く。損傷した頸髄を保護するために着用していた装具も、外すことができるようになった。

リハビリの時間、作業療法士も理学療法士もただ機能訓練をするというのではなく、いろいろ父に話しかけてくれる。見学がてらに会話を聞いていると面白い。

OT「僕の名前は？」

父「わからん」

OT「ヤマザキだよ」

父「ヤマザキさんか」

OT「そうだよ。明日も来るで覚えといて」

父「すぐ忘れてまうで・・・」

OT「10 忘れるなら、11 覚えなにかんね」

父は、人の名前を覚えるのが苦手である。



毎日声をかけてもらっているが、1 か月たっても一向に覚えられない。それでもヤマザキ先生はあきらめず、声をかけてくださる。

そのうちに、父の方も進歩した。

OT「僕の名前は？」

父「ヤマザキさん」

OT「見たね」

名前をではなく、素早く名札を見るということを覚えたのである。まあ、いいか、素早く見ることも能力の一つだ。



PT（理学療法士）「今日のリハビリ何回目？」

父「初めてだろ？」

PT「初めて？ 午前中はなかった？」

父「ああ、あったなあ。ほんじゃ、2 回目か」

PT「僕、さっきもリハビリやってるの見たよ」

父「ほうだったか？」

PT「さっきは髪長い女のひとと歩く練習をしていたよ」

実際は3回目。でも、父にとっては、いつも初めてのリハビリ。毎回、新鮮な気持ちでリハビリに取り組んでいる。



リハビリ病院では、月1回家族カンファレンスが開かれる。リハビリ担当者や看護師などから、直接その月のリハビリの進捗状況と次の月の目標や方向性を聞いたり、疑問な点を質問したりすることができる。

看護師の話では、尿意を感じられぬ父であったが、毎朝トイレ誘導を続けていたら、ある朝、便座に座った途端、自力で排尿ができた。すると、翌日から日に1回程度ではあるが、カテーテルで導尿せずに排尿することができるようになってきた。これは、排泄機能がもっと回復する期待が持てる。

腕の力が随分強くなり、プッシュアップの動作の繰り返しで、3メートルほどの移動もできるようになった。立ち上がりやベッドと車椅子の間の移乗もスムーズになってきている。平行棒を伝って歩くことも、できるようになっている。この調子だ、父さん、がんばれ！